

飛身長目

通巻173号 平成30年4月1日発行

「修身教授録」探求（第三百三十六回） 女の修養のむずかしさ

森信三

いたづきのなほのこる君を

海山のはたてにおると思はむものか

赤彦

これは赤彦が歌の上での親友の齊藤茂吉の留学渡欧の際に見送って詠んだ歌ですが、以前に掲げた「長崎へ」の一連と同じく、茂吉に対する愛情が良く詠まれていると思うのです。この時茂吉はまだ病気が十分には全快していなかっただけに、これを見送る赤彦の感慨もまたひとしおなるものがあり、それがこの一首のしらべの上によく表現せられていると思います。

近ごろわたくしは、女性の修養という問題が、如何に困難かということをし、しみと感じつつあるのであります。もちろん一方から申せば、女の人が真の女性となることの困難さは、男子が其の男性となることの困難さと比べて、そこには何ら違いはないともいえます。が同時にまた男女によつて、そこには多少趣の相違があるかとも思うのです。漢方医の話によりますと、婦人の病気の場合には、その薬は少なくとも五六租以上の複雑な配合をしなければならぬとのこと

ですが、つまりそれだけ婦人の身体は、男子のそれと比べて複雑であると共に、またデリケートなために、どうしてもそうしなければならぬというのでしよう。もちろん、むずかしいと言えば、人間が真に人間になることの困難さは、何も男女によつて難易の差のあるべきはずはないとも言えましょう。が同時にまた他面、女性の道は男子のそれと比べて、一そう困難だという一面もあるようであります。それというのも女性は、その身辺の事情が男子と違って非常に複雑ですから、そのために自分の修養ということが、男子と比べてはるかに困難といえるわけであります。今この点を一例を以つて申しますと、男子は結婚後といえども、自分の修養上色々な話を聞くことも、もしその心掛けさえあれば、比較的容易に出来るわけであります。例えば日曜日の午前を、何か修養の集いに出かけるなどということは、俸給生活者であれば、じつにたやすい事であります。また俸給生活者でなくても、そういう人々は、いわゆる時間勤めの束縛がないわけですから、かえって時間の自由が利くともいえます。ところが女性がなりますと、いかに良いお話があるからといって、一家の主婦が半日家をあけるといふことは、少なくとも男子のようにそう身軽に出来

ることはないでしょう。即ちそこには、まず第一主人の同意を得なければならぬでしょう。ところがそのさい講師の先生が、ご主人も平素尊敬している人でもあれば、何ら問題がないばかりか、時には夫妻一緒に出かけてお話を伺うという場合も珍らしくはないでしょう。

平成30年4月1日発行
かかるに今主人に道を求める心のない場合は、たまの日曜日に主人に留守居をさせて、奥さんだけが、しかも主人から見れば何処のどういう人か、よく分りもしない人間の話を聞くために、半日家を明けるといふことは、主人の立場からはあまり有難い話ではないわけです。ところが、子どもを連れてお話を聞きに行つて、もし泣き出されでもすれば、人様に迷惑をかけることになりすし、さりとてたまさかの休日や、いかに修養の話のためとはいへ、夫に子どもの守りを委せ切りにして、一人身軽に出掛けるというわけにも行きにくいでしょう。またかりに出かけたとしても、普通お話はまず正午一パイは掛るとせねばなりません。そうしますと場所にもよりますが、家へ帰れば一時過ぎといふことになり、それから食事の仕度にとりかかられたんでは、家族の者ではまんが出来ぬということにもなりましよう。以上はホンの思い出ずるまを述べたに過ぎませんが、しかし

今申しただけでも女性の修養が、とくに結婚後はそれが急速に困難になる事的一端は、お分りになるかと思ひます。

そもそも男性というものは、学校卒業後世の中へ出たからとて、必ずしも最初から完成を要求されるものではない。と云ふところが女は一たび結婚すれば、ある意味では直ちにある種の完成を要求せられるのであります。たとへば男子は学校卒業と同時に就職して、人間としてはまだ未熟で折々どうかと思われるような節があつたとしても、周囲の人々は「何しろあの君も未だ若いんだから、そのうちには分つてくるさ」といつて、大目に見てくれる処があります。かくして男子は、年と共に経験を重ねてしだいに磨かれてゆき、四十を少し越える頃ともなれば、大ていの人が賢愚の別を外にして、一応世の中の見当もつき初めるのであります。しかるに女性の場合は、いかに結婚早々だからとて、その手抜きは、男子の場合ほど大目に見て貰へるとは言えないのであります。もちろん周囲の人々としては、なるべくさういふふうにするべきは、申すまでもないことですが、しかし実際問題としては、「うちの嫁もまだ若いのだから無理もない。そのうち小十年もすれば、だんだん分つて来るだろう」とは、仲々言つて貰へないのであります。

かように申しますと、あなた方は如何にも不公平だと思われるでしょう。でも、もしあなた方の息子のところへお嫁を貰つた場合を考えてみられたら、今わたしの申したこともお分りでしょう。即ちいかに若くても、いやしくも他家へ嫁いだ以上、そう何時までもボンヤリしてはいられないというわけです。即ち女性はいかに若くても、いやしくも他家へ嫁いで一家の主婦となつた以上は、ある程度人間が出来て、しつかりしていなければ困るのであります。それと申すのも、女は一旦他家へ嫁ぐやいなや、最初から主婦として一家の重責を負う身だからでありまして、ここに女はいかに若くても結婚と同時に、ある意味での完成を要求せられるゆえんがあるわけでありす。

ところが男子といふものは、先ほども申すように世の中へ出て最初から重責につくわけではありません。最初はごく末席であつて、それが年と共にしだいにその職責が重くなつてゆくというわけでありす。この点は女の人が結婚と同時に、主婦として一家の中心責任者の地位につくのは、大いにその趣を異にするものがあるわけでありす。即ち女性は結婚と同時に、最初から主婦という重責につきますが、男子の方は順を追つてしだいにその責任が重くなつてゆくのであ

ります。そのうえ男子は前にも申すように、青年時代にはほとんどの人が、わが家を離れて色々世間の波に挟まれていくわけです。そうとう立派な家庭に育った人でも、わが家を離れた生活経験をもたない人は、ほとんどないと言ってもよいでしょう。ところが女性は最初からある意味での完成を要求せられているにも拘わらず、ほとんどの人が結婚までは、親の膝元で親にもたれ掛った生活をしていて、いつてもよいでしょう。ですから、舅（しゅうと）や姑（しゅうとめ）のあつる家へ嫁いだりしますと、それを辛く思うわけがあります。

かような次第ですから、女の児の教育は、一応そのすべてを、わが家にいる間に躰けねばならぬわけがあります。男の子の方は、家業をつがすとか、実業家にするとかいって、相当早くから将来の方向を決めることも出来ませんが、女の子の方は、将来どういう処へご縁が出来るやうら、一切分らぬのであります。もしうちの娘は役人でなければやらぬだの、医者でなければご免こうむる等と言っていたら、それこそ結婚は容易なことではないでしょう。ですから女の子は、将来いかなる職業、いかなる家風の家へご縁があるか、どうか一通りは困らぬだけの躰けを、わが家において、小さい頃から

して置かねばならぬわけであります。

先に、女性は結婚早々から、ある意味での完成を要求されるものだと申しましたが、もちろん如何に女の人といえども、最初から完成ということとは出来ないことは、申すまでもないことです。否完成などということとは、お互に一生かかっても厳密には出来ることではないでしょう。だが、それにも拘わらずお互人間は、完成へ向つて努力するということは、男女の別なく人間としての務めといつてよいでしょう。ではこのような矛盾は、一体どうしたらよいでしょうか。即ち一方からは、人間の完成は一生の問題であるのに、他面には、人生へのスタートともいうべき結婚早々から、ある程度の完成が要求せられるというこの矛盾に対して、あなた方女の人は、一体どのようにその身を処したらよいでしょうか。ところがこの点の解決は、わたくしとしては、道はただ一つしかないと思つては、道はただ一つしかないと申せば、素直さということであり、一口に申せば、素直さということであり、素直さや不十分な点があれば、色々未熟さや不十分な点はあるとしても、それで無事に行けることとでしよう。即ち素直に良人や姑のコトバを聴くことさえできれば、たとえ未熟な点はあるとしても、問題は起らずに済むわけであり、随つてまた女子教育

の根本は、このような素直な女性を作るということにもなるわけであり、ところが今日の女子教育は、遺憾ながらこの点では大いに不十分といつてよいでしょう。即ち今日学校教育を受けている女の人は、家事のことがよく出来ない以上に、人の言う

ことが素直に聞けないようであります。また今日教育を受けた女性は、人に不平の色を気取られぬようにというやうな嗜みは、ほとんど考えなくなつたやうであります。そして、ともすれば「でも」とか「だって」とか言うやうなコトバが出やすくなつたやうであります。そして次には色々理窟が出るわけですが、かりに理窟は言われない場合でも、ありありと不満の色が浮ぶということが、現在学校教育を受けた女の人の共通現象と言つてもよいでしょう。

そこであなた方としては、先にも申したやうに、将来男子のやうに、家を外にして自由に修養の機会が求めにくいわけですから、何時までもボンヤリと、唯浮々とした考えでないで、女性としての自分の将来を見通して、現実の一步一步を着実に踏みしめて行くことが大切だと思つて、それにほまず第一着手として、人の言うことを素直に受け容れられるやうな人間になることだらうといえましょ

う。ご両親のおつしやる事が素直に聞けるようになれば、将来結婚後も、良人や姑のコトバを素直に聞くことの出来る下地ができたというものです。そこでご両親、とくにお母さんに対して口答えをした後は、「しかしこれが結婚していたら、こんなことを言っていたら、いらねえだろ」とと考えてみられるがよいでしょう。真の修養の工夫というものは、例えばかような調子のものといってもよいでしょう。 (「修身教授録」第4巻昭和15年5月刊)

現実の見方 (微言)

森信三

○近ごろ私は、自分の物の考え方には終末論的などころのあるということが分つて来た。ここに終末論的というのは、物事をすべて、その最終の結末状態において見ようとする考え方である。

○世界の思想上、終末論的な考え方の最も顕著な実例は、キリスト教であり、ついではその裏返しとしてのマルクス主義にも、明らかにこの終末論的なものがあるといつてよい。

○私の場合の物の考え方が終末論的であるというのは、例えば現在をもつて、世界史の二等分線だとする見方などがその一例である。誰も世界史の最終点を見た者はなく、かくいう私自身も同様である。○私のこのような終末論的な物の考え方は、

思想としての長短はとにかくとして、実生活に関する点では、甚だ不適当なところのあることが近ごろになって分つてきた。

○というのには、常に物事をかの最終の終末において見ようとするこの考え方は、現実生活の上には頗る不適当な場合が多いのである。

○現実界のことは、丁度潮戸内海を舟でゆくようなもので、行きつく先は島で、もうそれから先きへは行けぬと思われるいても、いよいよその地点まで行つてみると、意外な方向に途が開かれているようなものである。

○つまり現実界というものは、絶対的な行きづまりということも少く、もう駄目かと思われる場合にも、また何とか新たな途が開かれる場合が多いのである。

○然るに終末論的な思想傾向をもつ場合には、とかく終末点を固定して考える処に、ともすれば悲観的となり、転変する現在の動きに対して、次から次へと手を打ってゆくということが不得手となりがちである。

○このことは結局私の性格が、非実践型な人間だということであるようである。私は最近この点を骨身に沁みて痛感している。

○実に実践型の人々は、物事を決して終末論的には考えない。何となれば、実践型の間人は、歩一歩現実の地上を歩いて進んでゆく人間だから。

○随つて実践型の間人には固定概念というものが無い。固定概念を常に打破つて、その時その時に対処してゆくところに実践型の特徴がある。

○然るに私のように、常に最後の結論を予想し、しかもこれを固定的に考えていては、現在への対処ということが出来なくなり、ここに私の非実践的性格の基本的なものがあると思う。

○私は最近ようやくこの点に関する自覚が得られるようになってきた。それは私にとつて辛くはあるけれど、実に大きな収穫といつてよいと思う。

(「開頭」55・56合併号 昭和26年7月刊)

あとがきに替えて

若い女性に対しかかる講義が出来ている学校は皆無に近いかと推察する。男女共学が多い学校で、女性だけ集めての講義はカリキュラムや時間割構築の関係等あつて、なかなか実施は難しいのが現場ではないか？森信三先生は女子師範での講義であつたのでその環境は理想であつたらうが、その内容を男性教諭が担うのは、概してしんどいことであると思う。脱帽の外なし。(30日二繁)

〒633-0003
桜井市朝倉台東2-538-189
電話 0744-4513422
Email: hji3@ken.jp
http://web1.ken.jp/syushn